

・母親の焦りや不安を取り除くために、心情を受容し、精神的な安定を図る。

・担任から、S男に関する情報を収集し指導の連携を図る。

6. 指導援助

・初回面接では不安と緊張からことばも少なく、落ち着きのない状態であったが、本人の得意な運動を実施した後は、人が変わったように生き生きとした表情になった。

この様子から2回目以後の面接にキャッチボール、バドミントン、バスケットボール、卓球など、S男の好む数種の運動を選択させ毎回活動させることにした。運動後は、素直に現在の心境や、こうなりたい自分の姿を話すなど、次第に情緒の安定が図られていった。

・その後の相談から、S男は学習に対するストレスが高く、うまく学習集団に適應できないことがわかった。

・そこで次の(1)~(4)のような段階を経て、再登校できるよう援助した。

(1)学級や学習に関係のない、集団への参加

【少年ソフトボールへの参加】

・S男との会話の中で、次のような不安が分かる。

T 「S君ソフトボールしていたの？」

S 「ん~でも今はやっていないよ」

T 「やってみたいと思ったことは？」

S 「やりたいけど………だけど………僕学校に行っていないからなぁ」

・思いっきり動いた後は、気分がスッキリするためか、ソフトボールをして友達と遊びたいというS男の気持ちがわかった。

☞ このことから担任に連絡を取ってS男が継続してソフトボールの練習ができるように配慮することにした。

・これを契機に友達とのつながりが強くなり、自宅に友人が頻繁に遊びに来るようになった。

【長期休業中に】

・長期休業中、毎日のように友達と遊ぶようになった。

☞ 担任の計らいで、学習が遅れ気味の児童を集めて、勉強会を開いた。

・休み中であるとはいえ、教室に入り、学習が遅れ気味の4、5名の生徒と一緒に勉強し、宿題もほとんどできて、登校に自信を持つようになっていったと考えられる。

・S男は友人に3学期は学校へ行くと、自分から約束した。

(2)学級外での学習への適応

【校長室登校の試み】

☞ まだ登校することへの抵抗はあるが休業中に友達関係が深まり、課題などに取り組むようになった。

学習に対する意欲も出てきたことから、少しずつ登校刺激を与えた。

登校刺激のポイント

・必ず登校しなくてはならないという意識をさせない。

・時間はいつでもよい。

・場所は教室でなくても構わない。

など、安心して学校に行けることばかけをする。

その後、長期休業明けから短時間ではあるが、学級に入ることでできないS男が校長